

高校

◎「巻頭エッセイ」夜ふけに草をしめらせた露が……

／新川和江……1

◎「現代を考える」いのち／朴慶南……5

◎「枕草子」と「大鏡」を読む／風間誠史……7

◎男子校における源氏物語講義―純愛物語？ としての桐壺の巻―

／兼坂壮一……10

国語

◎「三四郎」と「こころ」をつなぐもの／宮島茂樹……14

◎漱石・鴎外をどう読むか？ 二人を現代に教室で読む意義は何か？

―2・3年生そして入試評論へと継続した実践からの考察―

／江崎寛……17

◎「学校探訪」学校全体でとりくむ論文指導（総合的な学習の時間）

／東京女学館中・高等学校……22

教育



三

2004年

省

夏号

堂

夜ふけに草をしめらせた露が……

●詩人
新川和江

(しんかわ・かずえ)

旅

先の宿で、朝食に甘塩の鮭の切身がついてきたりすると、きまって思い出す詩が私にはある。昭和二十年代に読んだか聞いたかした児童の詩で、原型はすっかり忘れてしまっているのだけれども、その詩にこめられたいじらしいねがいが蘇って、かすかな痛みを私の胸中に走らすのである。

戦後はいずこも貧しかったが、乏しい家計をやりくりするお母さんが、時々たま夕食の膳にのせてくれる半切れのシヤケ。兄弟が多いので、半切れでもせいぎりの贅沢なのだとわかっていても、子どもにはそれが、なんともせつない、なさげない。早く大人になって、自分で稼いで、ひと切れ全部、シヤケを食べてみたい——という内容の詩であった。

こんな些細な事柄が、〈ねがい〉となり得た時代の子どもたちは、あれも食べよこれも食べよと、さまざまなお菜を押しつけられて、拒絶反応を起こしかねない近頃の子どもたちよりも、考え様によっては仕合わせかも知れない。欠如があつて、はじめてそれを満たそうとする願望が生じるのだから。

地震がきても雷様が鳴つても離すものか、というつきつめた表情で、ケイタイにしがみついている若い娘を、路上でも電車の中でも、よく見かける。おおかた、カレシと通信をし合っているのだろう。声を聞きたいと思えばすぐ声が聞け、会いたいと思えばすぐ会うことができる状態からは、〈恋〉は生じない。だから恋人ではなくて、無アクセントで発音されるカレシなのだろう。恋のせつなさも飲みも味わうことのできない当世の若い男女が、かわいそうに思えてくる。

私も若い頃には、いくつかの願望を持つには持ったが、棚ボタ式に成就する他力本願的なねがいは、持たなかったような気がする。夢みがちな小娘であつた反面、シャケの詩を書いた児童と同じく現実的で、〈ねがい〉と〈努力〉は同義語、自分の手でかち取るものと解釈していた。

長年詩に携わつてきた私に、今尚ねがいがあるとすれば、それは、表現の道具である〈ことば〉に、託した思いと等量の力が具わっ

【巻頭エッセイ】

てくれること。ことばにもし兵器よりも強い力があつたら、これまでも、多くの人々を不幸におとし入れる戦争なんか、避けられていた筈なのだ。

そんな大問題は措くとして、せめて私の詩を、どこかで読んでくださっている一人か二人のひとの、心に確実に届くよう、ことばをしなやかに詩の次元へと羽ばたかせることはできないものか。

こんな詩を書いたことがあつた。

ことばはいつ 詩となるのであらう

猿に噛みくだかれた木の実が

むろの中で年月を経て酒となるやうに

夜ふけに草をしめらせた露が

あけがた葉末で玉となるやうに

〈ねがい〉というより、それはもう、〈いのり〉に近いものなのかも知れないが。



●新川和江（詩人）

1929年 東京生まれ。

作品集に、『はたはたと夏がめくれ……』（花神社）、『わたしを束ねないで』（童話屋）、『新川和江詩集』『続新川和江詩集』（ともに思潮社）などがある。1983年、詩人の故吉原幸子さんとともに、女性のための初の詩誌「現代詩ラメール」を創刊。1993年終刊まで、女性詩人の発掘に力を注いだ。

【現代を考える】

いのち

●作家・エッセイスト

朴慶南

(ハク・キョンナム)

高校生を対象に講演をする機会が多い。タイトルは大抵の場合、これに決めている。

「命さえ忘れなきや」。

この言葉は、私の口グセでもある。いくら忘れものをして、失敗をしても、命さえ忘れていなければ、どんなことだってなんとかなる、大丈夫という文字どおりの意味だ。

つまり、命を忘れてしまつては、もう絶対に取り返しがつかない。自分の命も他の命も、命は唯一無二のものであり、いちばん大切なものだとことを表している。

結構、高校生たちにインパクトをもって伝わる言葉のよさなのだが、もう少し説明を付け加えることにしている。

命には、肉体的なものだけでなく、精神的命というものも

あるのではないか、それは、魂、尊厳、誇り（プライド）、人権……と言い換えてもよく、一人ひとりだれでもがもっている、もう一つの大切な命ではないかということである。

その両方の命を忘れないでほしいという思いから、いろいろな話をしていくのだが、特に声に力が入るところが次の言葉だ。

生きていくうえで、これだけは心に刻んでおいてほしいという前置きのあと、標語のように強調してしまう。

「死ぬな、殺すな（肉体的命）、踏みまじるな、踏みまじられるな（精神的命）」

私の強い思いがこもった言葉なのだが、語りながら、名状しがたい気持ちになつてくる。なぜかというと、現実を

前に、あまりにも大きな矛盾を感じてしまうからである。

「殺すな」。そう、人を殺してはいけないよ。殺してしまつたら、何をどうしたつて命は戻つてこない。本当に取り返しがつかないことだからね」

言うのは易しい。生徒たちの顔を前にして、胸がキリツと痛む。行うのは難しい。私たち大人は、一体どういうことをしているのだろうか。

大人は子どもに対して、「人を殺してはいけない」と言いながら、実際にやっていることは、まったく正反対のことだ。全然、説得力がない。

たとえ一人でも人を殺してしまつたら、当然のこのように逮捕され、裁判にかけられ、罪に服す。しかし、たくさんの人を殺すことが目的となり、殺せば殺すほど誉められ、褒美までもらえる戦争というものがある。

私が子どもだったとき、どうして大人は人を殺しちゃダメと言いながら、戦争という大量殺人するんだろうと、ずつと疑問に思っていた。いま自分が大人になって、子どもたちからそう問われたら、返す言葉が見つからない。

人間（生きもの）の命を奪うために、莫大な国家予算をかけて作り出される数々の「大量破壊兵器」。

それらを実際に使っているシーンをテレビや新聞などの

報道で目にする、命の大切さを訴え続けることが虚しくさえ思えてくる。

アメリカによるイラクへの攻撃。

子どもたちの間で諍いさかいが起きると、暴力ではなく、ちゃんと話し合つて解決をするようにと諭さとす大人が、気にいらなければ相手を問答無用に叩き潰つぶしているのだということを、デモンストラーションしているようなものだと思つた。イラクのフセイン元大統領の息子たちを探し当てたときのこと、アメリカは、手柄を確保するのではなく、殺害するために凄まじい爆撃を加えていた。

その映像を観ながら、「殺すな」という言葉を子どもたちに言うことの嘘々しさを感じた。恥ずかしいことである。

「死ぬな」と言つても、戦争になれば殺されてしまう。「殺すな」と言つても、同じく殺してしまう。「踏みにじるな、踏みにじられるな」と言つても、戦争ほど人間を踏みにじり、人間が踏みにじられるものはない。

「命さえ忘れなきや」は、イコール「平和さえ忘れなきや」ということだと、つくづく実感する日々である。

『枕草子』と『大鏡』を読む

—すべてを書く、すべてを語る意志—

●相模女子大学

風間誠史

(かさま・せいし)

新しい三省堂『高等学校 古典講読』には、源氏物語・枕草子・大鏡と平安時代の「古典」が並んでいる。『源氏』と『枕』については、「古典」の代表として並列することに疑問はないだろう。だが、『枕草子』の次に『大鏡』が来るのはなぜだろうか。

教科書を繰ってみよう。『枕草子』は、巻頭の「春はあけぼの」から始まり、ものづくしの章段がつづいてゆく。「すさまじきもの」「木の花は」「鳥は」「あてなるもの」「ありがたきもの」……と読み進めて行くと、「繊細で鋭敏な感覚と、独特の美意識」という教科書的な解説では処理しきれ

ない、日々の生活の中での体験や感じたことを書きつくそうとする、偏執的なまでの意志が感じられはしないか。「あてなるもの」として「削り氷に甘葛入れて、あたらしき金椀に入れたる」「梅の花に雪の降りかかりたる」「いみじうつくしき児の、いちごなど食ひたる」といった、偶然的な一場面、あるいは瞬間がリストアップされてゆく。そしてそれは書き留められることで、必然となっている。そうした偏執は随筆的章段でも変わらない。「九月ばかり」では、萩の葉の露が落ち、反動で枝が上にあがる瞬間を「いみじうをかし」と捉え、そう感じた瞬間に、こんなことは他の人には面白くもないことだろうと思ひ、さらにそう思ったことが「またをかしけれ」と記される。露が落ちたのも、それを見て思ったことも一瞬の出来事である。その一瞬に込められた豊かさが、今の私たちの心に伝わってくる。

『枕草子』末尾にはその成り立ちを記した一文が置かれている（「この草子、目に見え心に思ふことを」。ここでは、紙をもらったが何を書こうかと中宮定子に問われた清少納言が、「枕にでもしましょう」と言った有名な一節がある。ここで注目されるのは、清少納言への問いかけの言葉に、「上の御前には、『史記』といふ文をなむ書かせ給へる。」とあることだ。つまり『枕草子』は『史記』に対抗して、と

いうと大げさだが、少なくともそれを意識して書かれたものだということになる。そしてそれは必ずしも的是はずれとは言えないのではないか。一人の人間が、自分の経験を総動員して「目に見え心に思ふこと」を「書き集め」る行為において、両者には確かに共通するものがある。司馬遷の『史記』への思いを清少納言が知っていたかどうかはともかくとして。

さて一方、『大鏡』は、言うまでもなく紀伝体の、つまり『史記』に倣った歴史語りである。冒頭の「雲林院の菩提講」において、大宅世継と夏山繁樹という、超越的な語り手を虚構し、そのことによって藤原道長の栄華とそこに至る様々な出来事を徹底的に語り尽くそうとしている。つづく「かくて講師待つほどに」で世継は、道長の栄華を語るためには「あまたの帝王・后、また大臣・公卿の御上を」語る必要があり、そうすることで「世の中のことの隠れなく」明らかに行けると断言している。ここにもまた、語ることにへの偏執、「世の中のこと」を「隠れなく」語り尽くそうとする意欲が見られる。そして彼は「いみじうこそ」(まさに偏執的なまでに)「言ひ続け」るのである。

『大鏡』は通常教科書で読まれる際には、どうしても面白いエピソードを断片的に取り上げられるかたちになり、歴史物語というより説話集、あるいはゴシップ集的な面が印象に

残るのではないか。しかし本来『大鏡』は「歴史」を語り尽くそうとする書なのである。この『高等学校 古典講読』では、藤原道長伝の発端部を「強運」というタイトルで採録しており、そうした『大鏡』本来の姿を垣間見ることができる。道長の出自、昇進の経緯がいわば事務的に記され、その後道長の出世の契機となった疫病による大臣・公卿の死亡記事が続く。読んで面白いかと言われると困るが、『大鏡』が道長をどう扱っているかを見るうえで重要である。有名な「競射」の段では、道長の器量が強調されるわけだが、『大鏡』は人物の器量だけで成功するといったロマンチックな見方はしていない。「姉、詮子」の段では、道長の関白就任が天皇に対する詮子の強引なまでの説得によるものだと語る。道長の栄華を記すことではない。道長の栄華に至るさまざまな要素をとらえ、その総体を語ることに『歴史』だと考えているのである。

このように、自分の見たこと、知ったこと、感じたことを書きつくそう、語り尽くそうとしたという点で共通する『枕草子』と『大鏡』は、その「見聞」において重複する対象を持った。『枕草子』においては中宮定子の兄弟として、『大鏡』では道長の競争相手として登場する、藤原伊周・隆家の二人である。前者においては、宮廷サロンにおける教

養と機知を代表する、いわば理想の男性として描かれた伊周・隆家が、後者においてはあからさまに道長の引き立て役となり、幼兒的で無能無力な人物として描かれる。

もちろん、どちらが正しいということではない。どちらも正しいのである。『枕草子』は自分の見た通り、感じた通りの二人を描いたし、『大鏡』の語り手もまた、自分の得た情報を忠実に伝えているのだらう。『枕草子』の視野の方が一見狭いように見えるが、しかし、役割が固定されてしまった『大鏡』よりも自由な筆致ともいえよう。いや、『大鏡』の伊周・隆家だって、ある意味で愛すべき人物として描かれている。どちらも面白い。そしてどちらからも、「歴史」の生の声が聞こえてきはしないだろうか。

男子校における

源氏物語講義

— 純愛物語？ としての桐壺の巻 —

●法政第一中・高等学校

兼坂壯一

(かねさか・そういち)

一、高校三年で源氏物語を扱う意義

大学付属の男子校である本校国語科では、高校三年次の古典において、一年間（実質は二学期までしかないが）を通して『源氏物語』に取り組むというやや特殊なカリキュラムを組んでいる。その意義としては、高1、高2で学習してきた内容の集大成として、複雑な人物関係を読み解くのにすぐれた教材であること。語りの問題や敬語法なども含めて基本古語が十分に網羅されている難解な文体であることなどが挙げられる。また授業で扱える巻は限られてくるとはいえ、断片的な話で終わらず、その断片が大きな流れの中で連鎖している点に長編を長い時間かけて扱う意義があるといえる。さらに男子校という特殊な環境で、男の

論理、男の視座に染まりがちな生徒たちに、女性である紫式部のメッセージを読み取らせることによって、男性中心的なものの見方を相対化させるという意味でも、あえて男子校において源氏物語に代表される女性文学に触れさせることは意義のあることであると思われる。

二、授業で扱った巻々と一年間の流れ

授業で扱った巻々は「桐壺」「若菜」「紅葉賀」「藤裏葉」「若菜 上」「柏木」「御法」「総角」「浮舟」である。

一年間『源氏物語』に取り組むといっても、週二単位のコマ数で、二学期までということになれば、実質四十時間前後の年間授業数となる。その限られた時間数の中でどの巻を選ぶかは、それぞれ担当する教員の裁量に任ざれているが、自分はず、光源氏の出生からいわゆる「紫のゆかり」を中心に繰り広げられる恋愛関係を扱った巻として「桐壺」「若菜」「紅葉賀」を読み解き、次に右大臣勢力との政治的闘争の末の栄華への道を扱った巻として「須磨」「明石」の巻の概略説明を口頭で行い、明石の姫君の入内が持つ意味を「藤裏葉」巻で説明した。ここまでをほぼ一学期で読み終えた。二学期からは、源氏が栄華を極めた晩年の苦悩を扱った巻として「若菜 上」「柏木」「御法」を扱い、そしてその因果を背負った光源氏の子孫たちの物語（特に

浮舟に焦点を当てて」というところを根幹に据えて「総角」「浮舟」「夢の浮橋」などの巻々を読んでいた。

以上のような巻々の選定以外にも、いわゆる玉蔓系列の巻々や、六条御息所にまつわる「葵」（車争ひ）や「賢木」（野宮の一夜など有名な場面を読んでいくという選び方もあるだろうが、自分としては大河小説的な大きな流れの中で、光源氏の生涯から一群の人々の在り様を追っていったほうが、一年間を通して授業としては生徒を飽きさせずに引っ張っていきけるのではないかと思ひ、このような選定を行った。

また、これら授業内容を補うものとして、生徒自身に任意の巻を選ばせて「源氏物語新聞」なるものを各学期に最低一部発行するよう課したことや、定期試験ごとに授業で扱った内容に関わる論文資料を読み込ませ、それらに関する論述問題を課したこと、さらに定期試験に加えて我が校特有の夏休み明けにある進路を決定する重要な試験を利用して、夏休み中に「若菜 上 下」巻を読破させたことなどが、『源氏物語』に対する読みを深められたように思う。

三、「純愛物語」としての「桐壺」の巻

生徒たちにアンケートをとってみると、一様に面白かったと答える巻としては、「桐壺」冒頭と、「若菜 上」女三

宮の降嫁、「御法」萩の上露、あたりが上位を占める。中でも更衣の死が迫った際に、桐壺帝が取り乱し、帝という立場をかなぐり捨ててまでも、更衣の死を看取ろうとする姿に生徒達は共感を覚えるようである。

しかし、この帝の行為の元をたどれば、摂関政治体制から解き放たれた理想的な天皇による親政を復活させるため、あえてこのような身分の低い女性を選んだとも言える。また、更衣の側としても、明石の一族につながっていく父大納言家の期待を一心に受けて入内してきた女性という意味で、この二人の恋愛を純粋な意味での純愛と呼べるかということには疑問が残るが、生徒達の認識レベルにおいては、身分や立場などもなげうった激しい純愛と映るようである。したがって、自分はそういった生徒達の共感レベルに沿いながら授業を進めていった。

四、「桐壺」冒頭の押さえどころ

恋愛が政治であった時代、「いづれの御時にか」に始まる冒頭の一文は、当時の読者にとっては強烈なインパクトをもっていた。それはなぜだろうという問いかけから始め、この一文には当時の摂関政治体制に対する反逆のメッセー

ジがこめられていたということを、まず歴史的背景から理解させた。この冒頭の一文のメッセージ性を理解するや、早くも生徒達は物語世界に引き込まれていくようである。

次に、絶対的な身分社会である当時の宮廷がイメージできない生徒には「同じほど、それより下らふの更衣たちは、ましてやすからず」のくだりがなかなか理解できない。そこで現代においても身分制度が色濃く残っている社会として、相撲部屋の例を挙げて説明した。例えば、親方から特別に目をかけてもらっている下っ端の幕下力士がいたとする。横綱、大関クラスの力士たちは、面白くないとは思っても、自分の身分は安泰なのであまり嫉妬もしないが、同じレベルで頑張っている力士や、はい上がっていくしかないそれより下の力士たちの嫉妬が強くなるのは想像に難くない。こういった説明でやっと生徒達はこの表現が腑に落ちるようであった。さらに、帝の恋愛、そして世継ぎの誕生が次の世を占い、様々な階級の人々の思いと結びついていた時代、そうした宮廷の波紋は、宮廷内にとどまらず、一般民衆にもまたたくまに拡がっていく。こうした場面では現代における「雅子様懐妊報道」や「愛子様フィーバー」の過熱報道ぶりを例として挙げ、当時の人々の混乱ぶりをイメージさせた。そしてその不安が現実のものとなり「男皇子さへ生まれたまひぬ」に何気なく使われている添加の副助詞「さへ」に込められた深い意味なども併せて読み取

らせた。以下、帝の第二皇子に対する寵愛ぶりや、それがまた新たに生み出す波紋、ヒートアップしていく更衣に対する嫌がらせを帝が庇うことによつてさらにまた恨みを買ってしまうという悪循環は「なかなかなり」という形容動詞をキーワードに読み解いていった。

そしていよいよ生徒たちが最も魅かれる更衣の死の場面に入っていく。更衣が病に伏して後もなかなか退出の許しを出せない帝。そしていざ退出させる段になり、更衣という身分に対するもてなしとしては破格の車を用意させてまでも、なお未練がましく泣きついて、退出させられない帝の描写に、男である生徒たちは自分を重ね合わせ引き込まれていく。ここでは、男としての帝が「後れ先立たじ」つまり「死ぬときは一緒だ」と、「死」に重心を置いて更衣に泣きすがののに対し、女である更衣は「いかまほしきは命なりけり」と最後まで「生」に重心を置いている点に注目させた。そして最期の言葉となった「いとかく思ひたまへましかば」で、反実仮想の「ましかば…まし」を教えつつ、その省略されている部分で更衣は何を伝えたかったのかを考えさせた。「こんなことになるならば、愛されない方がよかった」と答える生徒が多かったが、「女もいといみじと見たてまつりて」という表現や、辞世の句の内容から判断してこの場にそういう解釈はふさわしくないのでは、という意見も多かった。また、「もつと皇子のことを頼んでおけば

よかった」など皇子の将来を心配するという意見もあったが、それもこの切羽詰った場面では打算的すぎるという意見もあり、ここは答えを限定せず、そのように思う根拠を述べさせるにとどめた。

また、更衣の呼称が、皇子を産んだ母親としての敬称である「御息所」から、そうした身分も何も取っ払った一人の人間としての「女」という呼称に変わっている点にも注目させた。そしてその「女」の最期の言葉聞いた時、「ともかくもならむを御覧じはてむ」と帝は決心する。この決断がどれほど重たいものかを、「あるまじき恥もこそ」の「もこそ」や「限りあれば」の「限り」などをもう一度想起させて理解させた。この帝という立場をも無視して、最愛の女性の最期を看取るうとする一介の「男」としての思いに生徒たちは「純愛」を読み取るようである。しかしまた一方で、純粹に愛するという行為こそが、更衣を死に追いやってしまったという側面も捉えなおす必要があるだろう。こうした問題を投げかけながらこの「桐壺」の巻を読み終えた時、真の意味で「愛する」ということはどういうことなのかを生徒たちは考えざるを得ない。すると、授業を終えて、ある生徒が質問にきた。

「先生、自分は彼女に対して、どれだけ彼女のことを思っているかということ伝えることだけが愛情だとばかり思っていたけど、彼女にとってはそれが必ずしも幸せでない場

合もあるんだね。ところで、更衣は最後に何を帝に伝えたかったんだろう？ 前の和歌から判断すると、自分はどうしても、女の側からも積極的に愛したかった、そして愛し合いながらもっと一緒に生きていたかったのに……と思っていたような気がしてならないんだけど、こういう解釈は間違っているでしょうか？」

この質問に対してはそういうことも十分に考えられるのではないかと生徒には伝えたが、こうした質問ができたこと自体にこの「桐壺」巻冒頭場面を読む意義があったと考える。

また一方で『源氏物語』が生徒を惹き付ける要素は、高麗の相人から予言を受け、臣籍に降ろされた光源氏が義理の母親である藤壺を慕い、不義密通を犯してしまうという荒唐無稽なストーリー展開にある。このストーリー展開の起点であり、根幹にあたる「高麗人の観相」の場面や、「藤壺思慕」の場面を取り上げてくれる古典の教科書が、その後の展開を把握させる上でとても扱いやすい教科書といえるだろう。

二、三四郎のおどろき

三四郎は、上京する列車の中で広田先生と出会う。広田先生は、高校で英語を教え続ける一介の教師に過ぎないが、社会を見る目は冷徹である。広田先生は、三四郎とのやり取りの中で、日露戦争（明治三十七～三十八年）後の日本を「いくら日露戦争に勝って、一等国になってもだめですね。尤も建物をみても、庭園を見てもいづれも顔相応の所だが」と切り捨て三四郎の「然し是からは日本も段々と発展するでせう。」という発言に対し、「亡びるね。」と言う。この言葉を聞いた時、三四郎は、熊本でこんなことを口にしたせよ、悪くすると国賊扱いされると驚く。広田先生はさらに「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より」と「日本より頭の中の方が広いでせう。「囚はれちゃ駄目だ。いくら日本の為と思つたつて最負の引き倒しなる許だ」と若い三四郎を諭す。日露戦争の戦勝に沸く中、「日本は亡びると予言する広田先生の冷徹な目は、英国留学をし、西欧文明の底力を知らされた漱石の目に他ならない。英国で漱石を追い詰めたものの正体は、西欧文明の奥深さではなかったのか。日清戦争に勝利し、欧米列強に追いつくことを国是とした当時の日本と英国の文明の奥行きとの差に絶

望したのではなかったのか。そして「囚はれちゃ駄目だ。」と言う言葉には、自らの苦い経験すら作品に昇華する漱石のたくましき、柔軟さが顕われている。そこには、物事を多面的に見ることのできる複眼的な思考がある。日露戦争後、わずか三十七年後に日本は太平洋戦争に敗れるのであるから、広田先生の予言は正しい。こういう文明批評は、当時全盛の自然主義作家にはないもので、自ら「低廻派」と称した漱石の一面目躍如たる所である。日露戦争は、日本の勝利に終わるが、国民が期待した賠償金は得られず、増税と戦後インフレに苦しめられた。人々の不満は、時の政府に向けられ、各地で暴動が起きたが、中でも日比谷暴動は政府を震撼させ、後の「大逆事件」へ向かう契機となる。そして日露戦争は、乃木希典という英雄を生むことになる。

三、世代の相違

『三四郎』では、與次郎が「丸行燈だの、雁首だのつて云うものが、どうも嫌ひですがね。明治十五年以後に生れた所為かも知れないが、何だか旧式で厭な心持ちがする。君はどうだ」と三四郎に語りかける場面がある。三四郎、與次郎と広田先生の年の差を言うわけだが、恐らく明治初年の生まれである広田先生は、旧式の人である。だから家に出

入りする里見美禰子に対し、「あの女は落ち付いて居て、乱暴だ」、「あの女は心が乱暴だ。尤も乱暴と云つても、普通の乱暴とは意味が違ふが。」という感想を持つ。全否定するわけではないが、理解したい所があるのであろう。元來、漱石は、漢籍を学び、南画を愛したように漢学の教養を身につけた人で、いわば江戸の教養人である。そういう人が、政府の命令で英国に留学し、西欧の文明と対峙したのである。明治二十年代に学生時代をおくった広田先生と明治四十年頃に学生時代をおくる三四郎、與次郎とは、その教養、感性に大きな差があるようだ。

四、明治の終焉

同じ図式は、大正三年に朝日新聞に連載した『こころ』にも言えることである。先生は、明治二十年代に学生時代をおくるから、広田先生と同世代である。先生は、明治天皇の崩御に時代の終焉を感じ、乃木大将の殉死に理解を不す。終章に「私は新聞で乃木大将の書き残して行つたものを読みました。西南戦争の時、敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死のうと思つて、ついに今日まで生きていたという意味の句を見た時、私は思わず指折つて、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きながられて来た年月を勘定してみました。西南戦争は明治十年ですから明治四十五年までには

三十五年の距離があります。乃木さんはこの三十五年間死のう死のうと思つて、死ぬ機会を待つていたらしいのです。〜」とあり、漱石にとつて明治天皇の崩御、乃木大将の殉死は大きな出来事だった。漱石に私淑した、志賀直哉は、明治十六年生まれで、三四郎、與次郎たちと同じ世代だが、乃木大将に冷淡で、その殉死を聞いて、「乃木さんが自殺したということ聞いた時、『馬鹿な奴だ』という気が、丁度下女かなにかが無考えに何かした時感ずる心持と同じような感じ方で感じられた」と日記に記している。志賀直哉よりさらに九歳年下の芥川龍之介は『將軍』の中で、「むろん俗人じゃなかつたでしょう。至誠の人だつた事も想像できません。唯その至誠が僕等には、どうもはつきりのみこめなものです。僕等より後の人間には、尚更通じるとは思われません」と乃木大将を語っている。広田先生は、明治の終焉、乃木大将の殉死をどう受け止めたであろう。恐らく、先生の受け止め方に近いのではないか。なぜなら明治十五年以前に生まれた旧式の人で、同じ教養、感性を共有しているはずだから。

《参考文献》

『大正時代を訪ねてみた』 皿木喜久 産経新聞社

『二葉亭四迷の明治四十一年』 関川夏央 文春文庫

『白樺たちの大正』 関川夏央 文藝春秋

漱石・鷗外をどう読むか？ 二人を現代に教室で読む 意義は何か？

—2・3年そして入試評論へと
継続した実践からの考察—

江崎 寛

(えさき・ひろし)

●愛知県立安城東高等学校

1 「舞姫」・「こころ」が歓迎されない現代文の教科書

「国語Ⅰ」から「国語総合」へと、科目名が変わり、教科書も新しい現代文の教科書が採択された頃ではないか。夏休み前の一学期、教科書会社の担当者が、足繁く学校にやって来て営業活動をされていた。その担当者の方々の情報交換において、共通した話題として気になったのは、「漱石はまだしも、鷗外は現代文に必要か？」という問いかけであった。担当者は、様々な学校を訪問しているから、我々より視野が広い部分がある。彼らが言うところは、自

分の指導にもいろいろな面で参考となるところが多い。その彼らが、一様に言うのである。確かに、私も現代の高校生には、難解な作品だと思う。加えて、現代文の教科書に、「舞姫」のような明治文語文が本当に必要なのか？ という素朴な疑問もある。(指導要領には記載されているが、実際の授業運営の問題として……)

ここでは、自分の拙い実践指導から、「鷗外」・「漱石」という二大文豪について「国語」の指導という観点で思うところを述べてみたい。

2 二大文豪の作品は現代を理解するうえで必要

先に結論を言ってしまうと、自分の実践から漱石・鷗外の小説は、近代を扱う評論を読解する上で、必要な作品である。現代評論を読み解く上で、その思想的文化的な基礎は、明治という時代があつて形成されたものと考えて。つまり、現代に至るまでの、我々のものの考え方を、ある程度論理的に理解する上で、明治時代は欠かせない土台(基礎教養)である。また逆説的ではあるが、入試問題で頻出の近代に関する諸問題を扱った評論の読解においても、明治という日本近代への入り口における人間の生き様や葛藤を描いた二人の作品は、現代評論を読んでゆく上でも必要不可欠な教養や視点を養う上での欠かすことのできない作

品であると考える。

3 入試評論を読む際の近代への視点の重要な手がかり

三年生の授業は、進学校の宿命として入試を意識した展開にならざるを得ない。二学期の半ばからは、センター試験も意識しなければならぬ。むろん、週五日制の中、進学を意識した授業は、一年時からの組み立てという意識が必須である。このような流れの中で、小説教材をいかに扱うかは、担当者がいつも頭を痛める問題であろう。私は、小説教材を扱う時、それに関連した評論を必ず組み合わせ使用するように心がけている。

二年時の「こころ」では、柄谷行人の「漱石の多様性——こころをめぐって」を、三年時の「舞姫」では前田愛の「ペルリン1888『舞姫』」（いずれも明治書院・現代評論選）を使用して、小説の背景にある時代性等にも言及している。これらは、前述のごとく入試評論を読む上での基本的な視点を形成する上で、欠かせない。教室における小説教材は、もちろん文学的鑑賞も必要であろうが、様々な現代文の読解能力を高めるための訓練や準備でなくてはならないと、私は考えている。個々の作品にこだわること必要だが、生徒にとっては、その作品は、成長の一過程の一作品であるはずだ。将来にわたって多様な視点や読み方ができてこ

そ、そこに生徒の個性あふれる鑑賞や読解が生じてくるはずである。

4 二年時の「こころ」と柄谷公人の評論 そして「現代日本の開化」へ

漱石の「こころ」は文学的に読めば、近代の「自我」とか「エゴイズム」などという定番？ の読解になる。私もその点は、授業において指摘もするし、考えさせもする。実際に授業においては、それらに加えて、なぜそのような人物を描いたか？ という漱石のあり方を柄谷公人の評論「漱石の多様性——こころをめぐって」を一つの拠り所にした読解から時代背景へと深めてゆく指導を心がけている。周知の如く柄谷は、この評論の中で二つの遅れを指摘している。一つは「そのつどそのつど、明晰に内省して疑いがないと思つたとしても、それは、すでに媒介されたものであり、その意味で『現在』はいつも『遅れ』ているのです。」という個人の心理の「遅れ」であり、もう一つは、歴史的な問題としての「時勢遅れ」つまり、明治の精神と殉死の問題である。

ここから、私は、授業の発展課題として、次のような問いを考えた。漱石が、明治という時代に何を期待し、何に失望したのか。そして、それでもなお文学者として生きた

時代背景を考えさせるようにしている。そしてこれを曲がりなりにとも考えさせることにより、生徒に現代の基礎となった変革の時代、明治を考えさせるきっかけとしている。(評論の読後に、Kや先生はなぜ死ななければならなかったのか? についてそれぞれの考えを600字程度で書かせて、それらをもとに、まどめを指導者側で行った。)

生徒に、授業後の感想を聞くと「歴史上では、江戸時代から明治時代にカチリと切り替わったように見えるが、人間は、年表のように変われないんだなあ。」というような感想が多く見られた。そして今後の発展学習として漱石の講演集「現代日本の開化」の概要を紹介した。この作品では、「開化」のためには、日本人は、神経衰弱にならざるを得ないが、それでも開化をすすめる以外に道はないだろう、ということも漱石は滔々と説いている。ここに日本の「近代」が背負う問題がある。これらの諸問題は、最近では、佐藤泉氏の『漱石 片づかない近代』(NHK出版)等をベースとした模試問題でも取り上げられている。

現代の学生が、現代の評論を読むとき、現代の基礎となった明治の文明開化がどのような問題をはらんで展開したかという原点に触れる上で、漱石の一連の教科書教材は、格好の材料ではないだろうか。

5 三年時の「舞姫」＋「調べ学習」から近代への視点

センター試験を一月に控え、模試に追われる三年生では、「舞姫」のような長編かつ難解な(昨今の生徒にとっては、漢語だらけの古文調の文章を読むのは、難行苦行そのものでしかないようである。)この作品は、授業をする側としては、頭の痛い対象である。(西三河の進学校は、早くて二期中盤からセンター演習に入るのが三年生の定番である。)しかし、前述のごとく入試を前提にすれば「舞姫」の授業はどうしても、やっておかなくてはならないものと考ええる。この作品を、日本という国家の枠組に捉えられた、エリート個人の苦悩と捉えるのは簡単だが、それを現代の高校生に提示したところで、彼らはエリスと豊太郎の恋愛に固執してしまうのが、関の山である。

そこで、明治という時代性に注目しつつ、主人公の生き様を読解した上で、その発展学習として明治期の社会的エリートとそれを取り巻く国家や近代へ移行する日本の問題点などに言及しながら発展学習を行うのを三年生「舞姫」の指導の常としていた。今回(平成十四年度)は、読解授業の後、幸いにも一学期中間考査後の数時間が、自由に使えたので、調べ学習的な要素を取り入れて、「舞姫」の発展学習に取り組ませた。

この発展学習の概要は以下のようなものである。

(1) 形式は五名から六名のグループ学習

(2) 各グループ毎に、読解後の疑問点を提案させて、

その疑問点について調べる。

(3) 調査結果を、週刊誌「舞姫」として、B4判一枚にまとめさせる。

(4) 各グループで発表し、相互に批評し評価する。

(5) 指導者側は、各グループの調査過程を、毎時くりアップファイルに集積させて、調査の経過を評価する。

(ポर्टフォリオ評価の試み)

この発展学習で、各グループが提出してきた疑問点は、以下のようなものである。

- ① エリート軍医森鷗外「舞姫」執筆の真相
- ② 豊太郎が別の道を進んだら
- ③ 豊太郎は二人いた
- ④ エリス(私)は愛されているのか
- ⑤ なぜ「舞姫」という題名か
- ⑥ 豊太郎の弱さの真相
- ⑦ 豊太郎の間違った道

一見して、誰がモデルか? という疑問や、題名についての疑問が目立つ。生徒は、ここから明治期特有の、日本の近代化における人々の葛藤や問題点の入り口を見つけ始める。むろん、そのような大きな問題に、この程度の指導で、生徒が到達できる訳は決していない。しかし、問題意識は彼らの中にわずかでも残れば、それは近代や現代の考え

る上での、なんらかの参考になるはずである。

この試みの成果については、東京法令出版「月刊国語教育・平成十六年四月号」で述べる予定であるが、その中で最大の成果としては、⑤の疑問を提示したグループが、石橋忍月の評論を持ち出して、文学論争に目を向け明治時代の文壇の雰囲気に触れたということであろう。

彼らが着目した忍月の意見は「舞姫という表題はおかしい、内容から考えれば『留学生』とか『豊太郎』等が妥当である」ということである。また忍月は、いわゆる「恋愛至上主義」的な発想に好意的な意見であったことも見いだしている。留学し西洋文明の申し子として帰国した鷗外が、実は日本の家父長制度や国家という枠組みに囚われていたのに対して、忍月の自由な発想は生徒たちには新鮮に映ったようである。彼らの感想を拾ってみると「明治の日本をリードしたと言われる『鷗外』よりも西洋的な考え(恋愛至上主義)を持った人がいたのには驚いた。」等という感想があった。そしてここにこそ「鷗外」と明治とを考える端緒が表れたといっても良いだろう。

概要のみの紹介で、わかりにくい点が多々あるうかと思う。しかし、「舞姫」の純文学的な鑑賞に偏るのではなく、その背景や森鷗外という人物の生き様等を関連的に紹介することに、前述したような「近代への視点」のきっかけが生じるはずである。

7 現代に二大文豪を教室で読む意味

私は、この二つの作品を二年越しで関連づけて読むことにより、近代（開化・明治）をどう見るか、という方向へ導くことを常としてる。彼らは文学者としては、文豪と呼ばれ、いわゆる成功者としても地位も確立している。しかし、小説の読解から発展学習へと視野を展開していくと、この二人は、意外なことに「近代」に関するスタンスが正反対のように見えてくる。ここからは全くの個人的な意見であるが、二人の近代のとらえ方は、「必要で変わるべきもの」と「守るべきもの」とのせめぎ合いの中で個人をどう捉えるか、という部分に集約されるように思える。

文学としてはもちろん、明治や近代等を扱った評論を読む際の視点の育成や背景の醸成として重要である。まして激しく変化する現代において、「変わるべきもの」、「守るべきもの」、そして「個人」、この三者をどう捉えるかを考える上で若者に教室で読ませたい作品である。

教科書の評論は、ポストモダン、近代の批判が主流である。しかし批判するだけでは次の時代は見えてこない。今までを否定し、批判するのは易いが、そこから新たなものを作り出す時の、人間の葛藤という意味では、鷗外や漱石の思いや悩みは、現代の若者に通じるものがあるはずであ

る。むろん彼らには国家という枠組みがあった。現代の「国家」は、常識的に見て大多数の若者には「枠組み」たり得ない。しかし、それ以外の「枠組み」、例えば、家族、友人、会社、学校など、若者たちが意識する「枠組み」は数多く存在するはずである。小さくてもそれらを守らなければならぬ場合、そしてその枠組みが外からの要請で変わらなくてはならない場合は、必ず存在する。その時、彼らは、鷗外や漱石の苦悩を共有することがあるはずだ。

時代が急速に変化し、自分の枠組みを変えざるを得ない現代、過去にそのような激変の時代をくぐり抜けてきた彼らの思いを読むことは、現代の若者たちにも決して無縁な物語を読む、ということにはならないと考える。そしてそのような悩み多き高校生が生きる教室でこそ、この二人の作品は、時代時代にあつた解釈で読まれてゆくべき作品であると考えている。

《参考文献》

『鷗外のオカルト、漱石の科学』長山靖生 新潮社
助言 愛知県立岡崎高等学校 教諭 村上慎一氏



平成 14 年度の論文集

をどうしてやりたいのかということについて相談して、課題の絞り込みをします。課題が決まったら、論文構成（大きな枠組みで何をするか）を考える。これが一学期の二度目の提出です。

次に、生徒の作った論文構成を土台として、生徒が選んだテーマの骨を教員と生徒の間で確認していきます。その骨をもとに、内容に踏み込んだ個別面接を一学期にして、夏休みに下書きを書いて二学期のはじめに提出、そして、最終的には三学期に提出、というのがおおまかな流れです。

教員たちにも、生徒の視座を尊重しながら、わかり

やすいかどうか、テーマをどう深めるかなどの相談にのりながら、事実をおさえて結論をきちんと書く、というスタンスの論文指導の土台ができてきました。図書館はこの当初から連携していました。先生方は、朝の電車の中で生徒たちの下書きを読むなど、少ない時間を有効に使って努力していました。指導者にとってもなかなか厳しいことですが、これで私たちもずいぶん力をつけさせていただきました。

生徒が選んだテーマを支える

編集部 K：できあがった論文集を拝見させていただくと、生徒さんの選んだテーマ、問題意識はほんとうに多様ですね。社会的に大事なテーマもたくさん生徒さんが扱っています。

編集部 N：生徒さんが自分でテーマや参考文献を判断して決定するためには、読む力、考える力が必要です。

福原先生：読む力も考える力も、本当に人それぞれです。テーマや参考文献を見つけないに行き詰まってしまうこともあるので、その場合は居残りでマンツーマンで指導しています。

編集部 N：参考文献を読まないで、聞き書きだけの人はい

ないですか

福原先生：聞き書きだけではなくて、聴いたことの裏付けをしたり、背景を補うために、例えば郷土資料館などで資料を探してくるよう、などの指導はしています。

編集部K：何も関心がない、書きたくないという人はいますか。

福原先生：それはいいです。何かあります。もし見つけにくくても、教員が指導していく中で、その人の中にある問題意識を、その人自身が形にしていく支援をします。すると、生徒も必ず応えてくれます。

編集部N：先生との信頼関係があるのでしょね。

福原先生：ギリギリの枚数であっても、生徒は必ず書いてきます。少なくとも三千字、四千字。資料は字数外です。論文ができてくるのは三学期始業式の日です。そして授業の場で発表します。

編集部N：最終的には授業の場で共有するんですね。生徒さん自身が一年間かけて色々な方に相談しながら、作品を削っていく中で、生徒さん自身が変わってきたというような面はありますか。

福原先生：生徒の自己評価表を作りますが、一生懸命取り組めてよかった、計画が大切なことがわかった、自分のテーマについてもっと調べたいと思った、などの振り返

りがあるようです。

編集部N：生徒さん同士の相互評価はしないのですか。

福原先生：プレゼンテーションを聴き合います。

編集部N：論文を書いていくときにグループを作っているようですが、そのグループはどのように機能していますか？

福原先生：グループでは、自分はこんなことをしています、というような報告をし合ったり、取材して書いていくというプロセスをサポートしあうのです。

編集部N：先生方が指導なさるときに、生徒さん一緒にあって、論文のテーマ探しを指導していらっしやる。自分がどうしたいのかということを引きちゃんと表現して、それを社会とつなげるといことは、とてもエネルギーのいることで、最初はひとりではできないと思います。だけれか伴走してくれる人がいないと、社会のどこに手をかけていいかわからないと思うんです。その困難なプロセスを歩くひとりひとりの生徒に先生方が伴走してくれるというのは得難いことですね。とても貴重です。

福原先生：教員にとっても得難い経験ですよ。

編集部N：先生方も生徒さんと共有するものがあるという意味ですね。どんなものですか。

福原先生：自分で課題を見つけ、自分で考え、解決してい

く力。それを身につけてほしいという思いです。そのためには、まず自分が何を知らたいのか、なぜ知りたいのか、知りたいことにどうアプローチしたらいいのか、壁にぶつかったらどうしたらいいのかと考え、壁を乗り越える方法を自分の力で見つけてほしいと思います。それは勉強だけではなく、クラブ活動や委員会でも同じです。考えて相談して、教員と話し合ってやっていく。将来大人になって何か問題にぶつかったときでも、「ああ、あんなやり方もあったな」と、思い出して、切り抜けていってほしいです。

人に伝える、発表するときの基本的な枠組みをおさえる。そうすれば必ず伝わっていきます。原稿用紙の使い方、記号の使い方、プレゼンテーションの方法。自分で考えて行動するという原点を身につけてもらえたら、と思っています。

編集部N：自分で課題を見つけないところをしっかりとやっていると、読ませるものを書くことができますね。大学のレポートでも、自分の中にないテーマ、与えられたテーマで書くのと、何かの切り貼りになってしまふことがある。生徒さんが書かれたものは、自分がなぜそのテーマにたどり着いたのか、というところを骨にして書いているので、読みやすいし、論文の最後まで読むと、その生徒さ

んの到達点、そしてこれからその人がどこに行くのか、ということが見えてきます。

福原先生：最初はそこまで行かなかったんですよ。論文の骨を見つけないところまで精一杯。次は、論文の形式を考えました。

編集部N：この人たちが卒業してから、このときの論文テーマが、進路に結びつくということはありませんか？

福原先生：ホスピスのことをやった人は、医療への関心を深めて医学部に進みました。そういう意味では、社会科の枠だけではだめなんです。理科も国語も体育も芸術も、科目の枠を超えて関わらないと。社会科の枠だけだと「ワグナーの歴史」ということになってしまふけれど、音楽の先生ならば、もつと別のアプローチもできる。理科ならば、科学的な発想も必要だし。そういう掘がりが今できているんじゃないかな、と思います。

編集部K：ひとつの問題にも、その人なりの切り口がありますよね。環境問題なら、社会的な切り口も自然科学的な切り口もありますね。

福原先生：教員も鍛えられますよ。自分の専門分野だけではだめなんです。

福原先生：自分の学年以外の生徒とも一年かけてつきあうことになるわけだから、勉強になりますよ。

編集部N：総合的な学習の時間で、中・高の専任の先生全員で、生徒さんのさまざまなテーマに対応していくというのは、すごいですね。

編集部K：「フランス革命」「練馬区の結婚」「尊厳死について」「人種差別について」など、本当に様々なテーマですね。

福原先生：岩手の無医村の取材をしてきた論文も面白かったです。先祖や家族がテーマになったときも、単なる自伝ではなくて、その時代とすりあわせて、その時代の中で先祖がどういうことをしたか、ということを書いてきています。

生徒自身の力を尊重する

編集部N：校正などはどうしていますか？

福原先生：文章で意味がつかっていないところなどは、教員がチェックしていますが、あとは生徒の力です。

編集部N：生徒さんの力でここまでくるんですね。語彙もあるし、文章力もある。書いていく中でつけるんですね。福原先生：生徒がテーマを出してきたときに、これからどうやって参考文献を選んでくるだろう、この人は、どこから入っていくのかなあ、と楽しみです。押しつけては

いけないから、こういう本もあるよね、こっちは調べてみたら、というアドバイスをすることはあるけれど、生徒自身で試行錯誤する力が大切です。生徒がそこにぶつかったとき、この生徒はどうするだろう、と楽しみでした。

図書館の関わり

編集部N：図書館の関わり方についてもお話をうかがわせてください。

徳田先生：小論文に必要な条件や、図書館での参考文献の探し方、小論文に役立つ本についてなど、全体にわたって指示できるようなことをプリントにして配付しました。生徒たちがふだん触れたことのないもの、つまり年鑑・白書というものはどういうものかなどについても解説しました。そのほか、図書館に新書を揃えたり、参考文献の選び方に生徒が悩んでいるときは、手伝ったりします。生徒のテーマが明確になってきたところで、この本ならば、来年でも使えるだろう、と判断して購入します。生徒たちは地域の公共図書館も利用しますね。どこに何が あるか、ということについては、こちら情報を与えますが、あとは個別に論文指導の担当の教員が指導します。

関わること、待つこと

編集部K：やる気のない人はどうしますか？

福原先生：受け身でやっている生徒は、遅れるんですよね。すると、友達が応援するんです。書き終わった人が、「あなた、書かなきゃだめじゃない」と。一緒に居残りをしして応援する。生徒たちはとても強いつながりを持っていますよ。遅い人の調べものを手伝いながら、残って一緒にやっている。非常に優しいですよ。サポートし合うんですよ。論文を書き上げる時期は、教員も生徒たちとずいぶん一緒にいます。朝相談にのって、また昼休み、そして放課後と。それをやっているうちに、教員と生徒との関係もできてくる。面白いですよ。このときに関わった生徒を高三でまた受け持つて、あの大変だったね」と語り合うこともある。書けない生徒がいても、切り捨てないで、先生も友人たちも関わっていくんです。

編集部N：友人や先生が自分を切り捨てないで向き合ってくれた、という経験は、生徒たちにとって、生きていく勇氣、自信になりますね。生きていくのには、人に相談する力も必要ですね。先生たちが、相談していいよ、と腕を拡げてくれているんですね。指導者としての今後の

課題はありますか？

徳田先生：私は昨年関わったばかりだから、課題としてはこれから明確になってくるのだと思っています。まだ本当に私自身試行錯誤なんですよ。

編集部N：徳田先生がうれしかったことは？

徳田先生：年末に、まだ書けないと言って図書館に来た生徒と残って一緒にやっているうちに、「わかった、こう書けばいいんだ」と、生徒自身が自分でわかっていくとき、お互いに共通の喜びをわかちあえます。

編集部N：もう共同作業ですね。教員も関わって一緒にやっていくのですね。

福原先生：社会科の教員が、あとがきで書いていますが、一二年間やっているうちに、論文の質の問題を考えるようになってきました。教員も論文のテーマや内容に入っていて、生徒が教員と議論しながら創っていければいい、と。それからプレゼンテーションをみんなできるようにしたいですね。

編集部N：議論は、教員とだけでなく、生徒さん同士でもできたらいいですね。

福原先生：そうですね。今後の課題です。

編集部K：本日は、本当にありがとうございました。

日本の食文化の国際化
人間とストレス
恐竜の絶滅について
ミャンマーの政治問題について
睡眠について
望月の本陣について
平安貴族の日常と文化
犬と人間の関係
微生物による生ゴミ堆肥化について
クローニングの応用とその危険性
死刑廃止
海洋汚染について
人間と生きる犬について
コンビニについて
児童虐待について
異常気象
超高齢社会と高齢者福祉
鳥
森林破壊
宝塚歌劇について
睡眠についての知識と再確認
フランス革：命について
盲導犬とパートナー
日本の戦争犯罪と戦後責任のとり方
冤罪
明治の洋館
オゾン層の破壊について
日本の税金
アポロ 11 号は本当に月へ行ったのか
英語の歴史
都市動物と人との関わりについて
児童心理
血液型と性格の関係
地下鉄サリン事件について…
犬と人間の共存
海外から見た日本人について
映像技術の進化
日本の食文化の歴史について
ロボットと人間の共生
盲導犬について
延命治療について
報道の落とし穴
ユダヤ人の歴史
一つの視点から考えて
ゆとり教育について
川越の街並みについて
アメリカと日本の暮らし方の違い
交通広告の現状と課題
自閉症について
日本とドイツの教育システムの違い

飛行機について
思春期
一ノ瀬泰造の生涯
太宰治とその狂気
グリム童話の謎
人間の寿命
自立
カルシウムの必要性
少年法について
神隠しについて
犬と人間の関係について
高齢化社会と少子化
日本人とアメリカ人の違い
～相互理解のために～
ユダヤ人虐殺について
一何故止められなかったのか一
政治家について
日韓関係の現在と将来
超常現象について
発声方法について
動物と人間の関係について
薬物乱用
これからの子どもたちの食生活
ゴシック建築について
子供のストレスの現状と対処法
アダルトチルドレンについて
紙のリサイクル
ダイエットについて
ファッション変遷史
未成年
日韓の友好関係
人間と音楽
マザーグースについて
インターネット
なぜ米語はここまで発展したか
リストカット
アメリカ人と日本人の国民性の違い
芸術スポーツと選手達
どうして第 2 次世界大戦は
防げなかったのか
家庭内虐待
アメリカ同時多発テロ～アメリカとイスラ
ムの歴史的な対立～
バリアフリーについて
尾崎豊
エジプトと宗教
言葉の変化について
薬の影響の大きさについて
アメリカの生活と日本の生活の違い

平成 14 年度課題研究テーマの例

今年度は約 96 編の小論文が提出されましたが、ここにはその一部のテーマ（論題）を掲載しました。

- テニススピリッツ
- 死刑の結論
- 死刑制度について
- 日本とアメリカの文化の違いについて
- 少年法と少年犯罪
- スイスと永世中立国
- パレスチナ問題について
- 四大文明について
- 世界が抱える森林問題
- 伝統的な宗教と社会との関わり
- 日本のODAをどのように改めていくべきか
- いやし系ブームの落とし穴について
- 宗教における日本人と欧米人の違い
- 動物愛護法
- 成田空港問題について
- 人はなぜ絵を書くのか
 - 人はどうして絵に惹かれるのか
- 犬の起源とその進化
- 「ジキル博士とハイド氏」について
- 町工場について
- エイズについて
- 介護保険について
- 介護保険制度と介護保険施設
- 東京ディズニーランドについて
- 浅間山荘事件について
- 現代の子どものポジション
 - ～戦後から現代へ～
- アメリカのスポーツ
- 高齢化について
- 富士山の歴史～世界遺産になるためには～
- 若者の就職に対する姿勢
- マスコミについて
- クローンについて
- プロ野球の将来
 - ～メジャーリーグ流出の危機～
- 衣服の起源
- ディズニーアニメーションの魅力について
- アルツハイマーについて
- 国際ボランティアについて
- 高齢化社会福祉について
- 現代の食生活
- イスラエルとパレスチナ問題
- 私達の歯と虫歯の発生
- 数の歴史
- 日本の衣服
- クローン
- マザー・ゲース
- 音楽の効果
- ケルト神話
- 学校について
- 東京ディズニーリゾートを探る
- インカ文明について
- 知られざる韓国・北朝鮮と日本の関係
- 土壌・地下水汚染の現状とその対策法
- タイタニック号沈没事故について
- インターネットの光と影
- サンタクロースについて
- 妖怪研究
- 茶道について
- 近代以前のユダヤ教徒
- 心の病気について
- スタジオジブリとその魅力
- 睡眠について
- クローン技術について
- エイズについて
- 現代における片仮名の使用について
- 日本は首相公選制にすべきか
- 現代の子供たち
- 漢方について
- バリアフリーについて
- 死刑制度の是非
- 音楽活動の条件
- 虐待
- プラセボ効果について
- 世界の食べ物
- アロエについて
- 各国の携帯電話事情
- 音楽療法とリトミック
- 本当の豊かさとは
- IT革命と豊かな暮らし
- ペットについて
- 高校の校則について
- アイルランドについて
- 砂糖について
- 音楽が人間に与える影響
- 音楽の人間に与える影響

三省堂

高等学校国語科教科書ホームページ

<http://tb.sanseido.co.jp/h-kokugo/>



内容のご案内

新課程国語教科書

2003(平成15)年度からご使用いただいている教科書の内容、ならびにこれらの教科書に対応した「年間指導計画」「評価規準作成の手引き」がご覧いただけます。また、2005(平成17)年度から新しくご使用いただく教科書「高等学校古典講読」の内容もご紹介します。

三省堂高校国語教育

小社発行の高等学校向け国語教育情報誌『三省堂高校国語教育』をご紹介します。バックナンバーもお読みになれます。

共通教材

古典文法や文学史、漢字、小論文など、国語科の学習に共通して必要な教材についてご紹介します。

書籍案内

ことばや国語教育を考える三省堂が発行する書籍の中から、国語教育に携わる方々のあいだで話題になっているものをご紹介します。国語の授業はもちろん、「総合的な学習の時間」の実践にもご活用いただけます。

その他「教科書展開例」「旧課程教科書」、「指導資料」をご紹介します。

お問い合わせは h-kokugo@sanseido-publ.co.jp

わたしを語ることばを求めて

牲川波都季・細川英雄 著／四六判・304ページ／
2,310円(税込)／ISBN 4-385-36198-3
早稲田大学本庄高等学院三年生の「日本語総合」の授業実践と
観察の記録。授業担当者・観察者である著者と生徒とが、内省
と他者との関わりを通して「わたしのことば」を獲得していく
ドキュメント。

声を読もう 声で描こう

——朗読のための17の栞
西川小百合・松丸春生 著／B5変型判・152ページ
(CD1枚付き)／1,695円(税込)／ISBN 4-385-36182-7
待望の朗読・読み聞かせの入門書。朗読による言語活動の活性
化の可能性と、文字を覚えることで失ってきた「声の力」を取
り戻す手だてを、易しい理論と実践から楽しく学ぶ。著者によ
る朗読を付録CDに収録。

ことばの学びと評価

国語科授業への視角

高木展郎 著／A5判・176ページ／
2,205円(税込)／ISBN 4-385-36178-9
新教育課程と新指導要領の実施で教育現場は新しい歩みを踏み
出した。課題の中心となっている「新しい評価観」「コミュニ
ケーションの重視」に正面から向き合い、実践的に教科指導の
新しい展望を示した論考の書。

国語科授業構想の展開

町田守弘 著／A5判・256ページ／
2,525円(税込)／ISBN 4-385-36186-6
長年にわたり中学校・高等学校の教員をつとめた著者が、学習
者中心の「授業構想」を提案する。サブカルチャーの素材を積
極的にとり入れ、現場の変化に対応した「授業構想」の具体的
実践例を多数掲載。

表現する高校生

対話をめざす教室から

中渕正堯・国語論究の会 著／A5判・296ページ／
2,925円(税込)／ISBN 4-385-36149-5
表現活動によって教室を活性化する「32」の事例集。生徒の表
現を素材に、「学習指導の展開」では授業展開を、「評価」では
表現を評価する観点を、そして「発展」では発展学習案を多角
的な視野で提案する。

三省堂高校国語教育 二〇〇四年夏号

二〇〇四年六月一日発行
[定価]……八〇円(税込)
[編集・発行人]……八幡統厚
[発行所]……株式会社三省堂
〒一〇一―八三七―一
東京都千代田区三崎町二丁目二番一四号
電話／東京〇三(三三三)九四四七(編集)
振替／東京〇〇一六〇―一五五四三〇〇

